

第 142 図 SU1 出土土器 (2)

4 遺構外の出土遺物

縄文土器

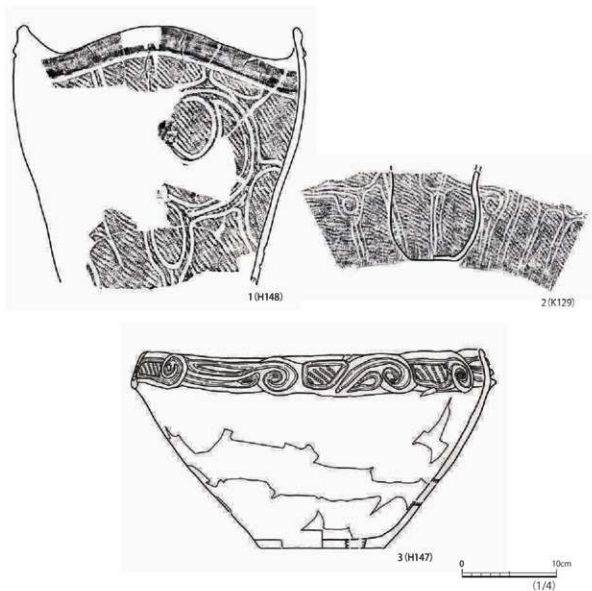
2区は、1区より残りの良い遺物包含層があり、大量の遺物が出土している。遺物の時期については、復元土器の状況からみると、縄文時代中期末葉の大木10式期のものが圧倒的に多い。中期中葉の大木9式期と後期初頭の門前式期が少々、中期中葉の大木8式期のものは僅少である。(以下、復元資料による記述)

縄文時代中期の土器

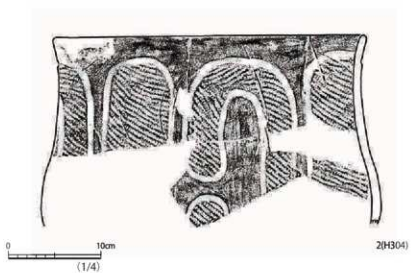
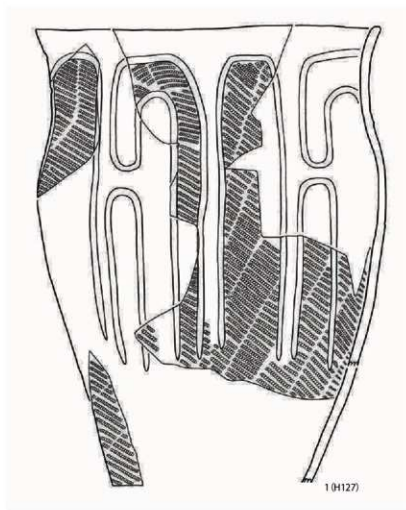
中葉の土器 (第143図 図版49)

深鉢大小計2点、鉢1点がある。1の深鉢の側面観は、いわゆるキャリパー形の締りの緩んだような形状で、口縁は緩い波状である。体部全面に縦方向を意識した、二重沈線渦巻文が展開されている。

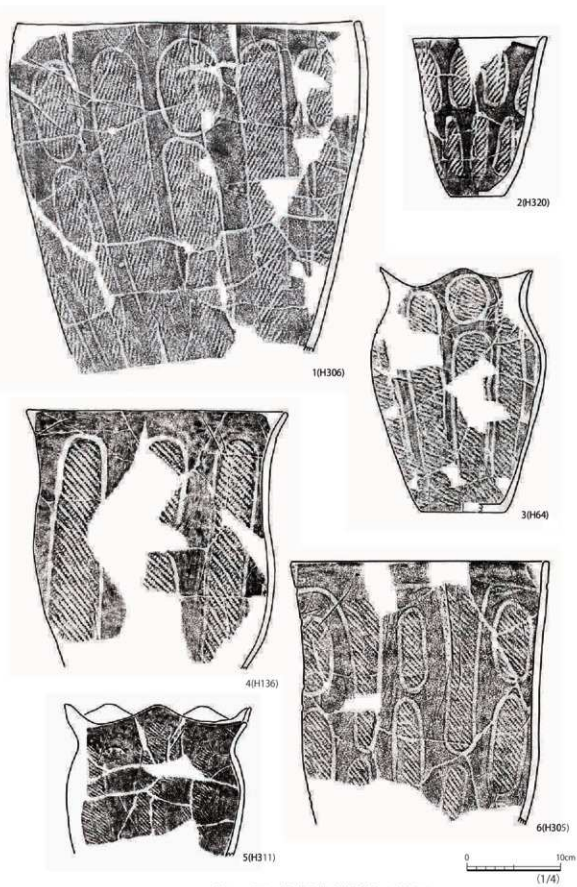
2の小形鉢は1より胴部の絞りが強い。体部全面に渦巻き文を展開しているが、渦文より縦線が目立つ意匠である。



第143図 縄文時代中期中葉の土器



第 144 図 縄文時代中期後葉の土器 (1)



第 145 図 縄文時代中期後葉の土器 (2)

3の鉢は大形で口縁が内傾する。口縁部を、浮彫的表現の渦巻き文が一周する。口縁部の一部に斜縄文が施されるが、体部全面は無文である。

後葉の土器（第144～146図 図版49～51）

大小11点の深鉢がある。口縁部が弱く内傾する形が基本であるが、肩張り（頸部較り）と胴張りのものもある。口縁は、平縁と波状口縁と2種ある。文様は、縦方向を強く意識して、大柄の円形や長円形の磨消縄文を器面全体に施する。

第144図1・2に見られる隣り合う2列を繋いだステッキ状文や、第145図6に見られる一列飛ばして区画線を繋ぐ変則・発展文もある。長円形の下部では区画線がなくなり、地文と一体化する。

第146図1の波状口縁の部分に浮彫的な渦巻き文を持つ例は、前型式の名残りであろう。

末葉の土器（第147～156図 図版51～55）

器形は、胴張り形が一般的であるが、単純上開き・口縁内反のものもある。特殊なものでは、極端な胴張り（袋状）のものがある。

文様は、第152図3・5に見られるJ字状磨消文を基本とする。

発展形として、第153図3、第154図2に見られる裏J字磨消文、第152図1、第153図2に見られるJ字の下部を曲げた逆S字状磨消文、第150図1～4に見られるJ字の表裏を合体したU字文、第147図2に見られるJ字磨消文の2段施文から変化し、磨消部が連結し格子状になった磨消文等がある。

文様帯の下部が連続する場合は、波状にうねる例が多い。中には、第153図3、第155図1に見られるように波頭形の付加文が付く例もある。

同様の特徴は、SU1から出土した第141図2・3にも見られる。

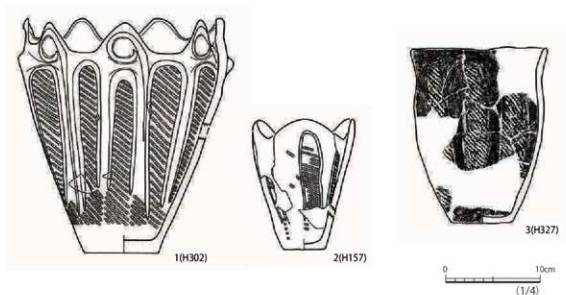
磨消区画線は、沈線の他に第147～160図に見られるような、隆線のものもある。

同様の特徴は、SU1から出土した第141図、第142図1にも見られる。

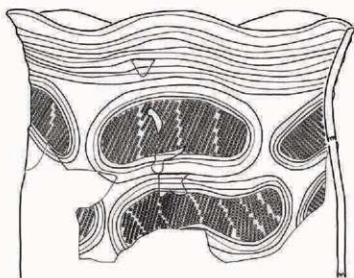
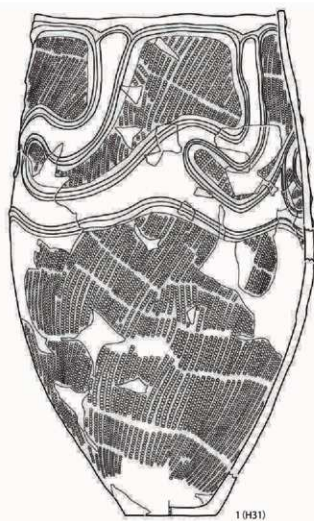
縄文時代後期の土器

初頭の土器（第157～159図 図版55～57）

深鉢の基本的器形は、体部は外反気味に開き、口縁部で一旦内反しまた外反する。磨消渦巻文を主文様とし、第159図2・3を除き、門前式の特徴である連鎖状隆線で区画する。



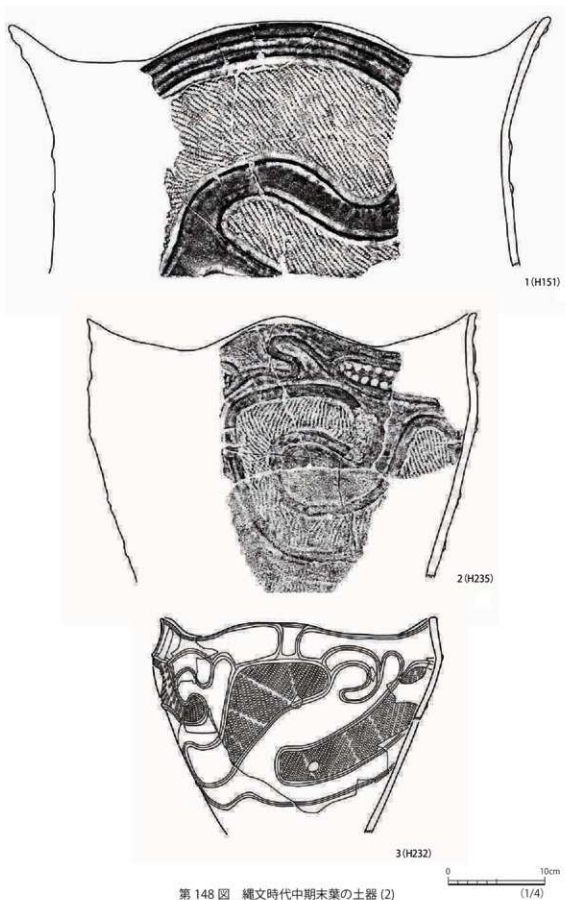
第146図 縄文時代中期後葉の土器(3)



0 10cm
(1/5)

2 (H341)

第 147 図 縄文時代中期末葉の土器 (1)



第 148 図 縄文時代中期末葉の土器 (2)

第157図1のような複合口縁に橋梁状突起が付くものや、4のような窓のある波状口縁となるものが多い。

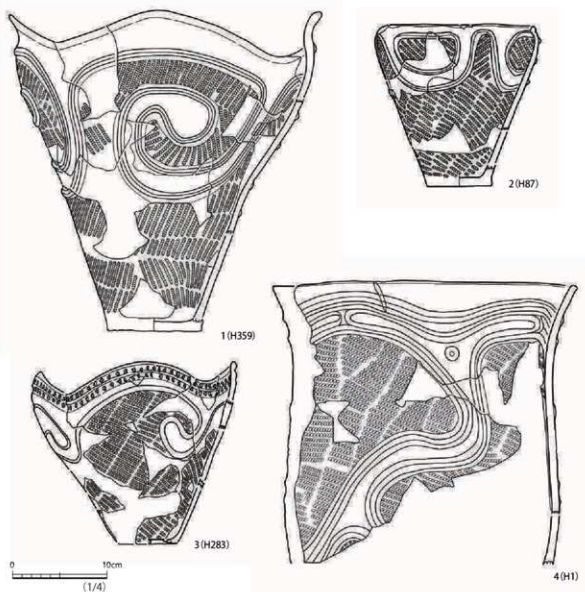
第159図1・2は、胴張りで口縁部が外反する器形であり、胴部以上に方形区画の文様帯を持つ。1には、縄文地に連鎖状隆線文で方形区画のみが施されている。2には、磨消技法で、方形区画と逆J字文風の文様が施されている。口縁部には、刻みのある弧状の短隆線が付き、体部文様の一部に円環状貼付文が付く。円環状貼付文は、連鎖状隆線文の交点にも付く。

粗製土器 (第160～166図 図版57～60)

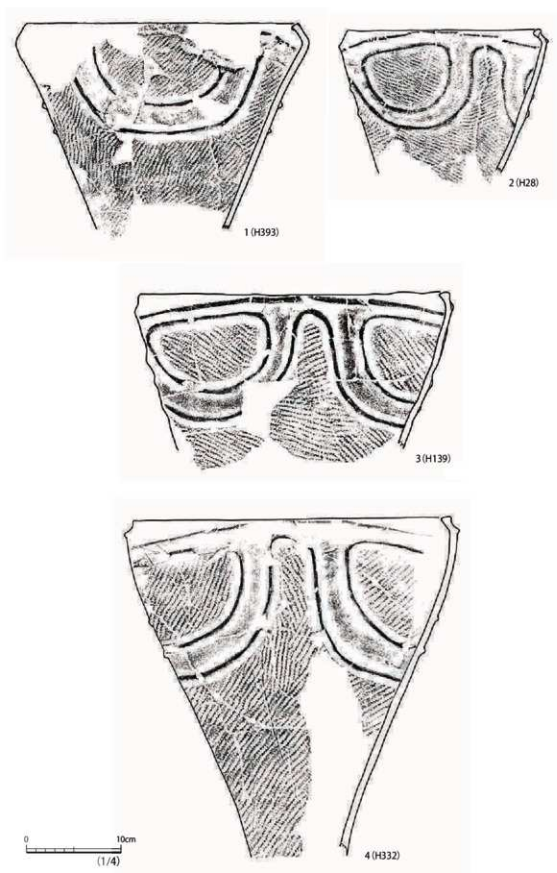
時期は伴出した精製土器から、中期後葉から後期前葉が大勢を占めると考えられる。

深鉢の器形は、口縁部が外反気味のものはごく少なく、内反気味のものが多く、その中に胴張りのものも少なからず見られる。

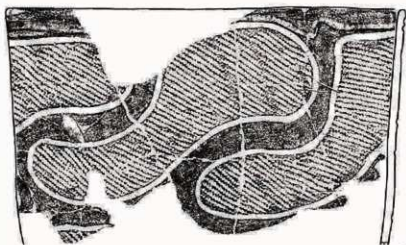
第161図5・7、第162図1のような、頸部で締り口縁が外反する甕形のは少数である。



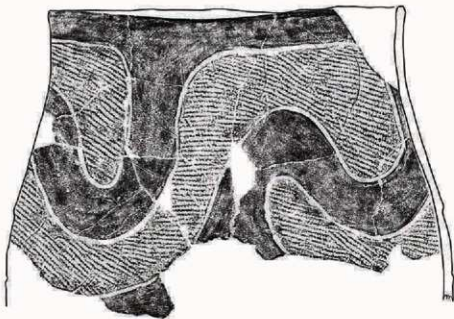
第149図 縄文時代中期末葉の土器 (3)



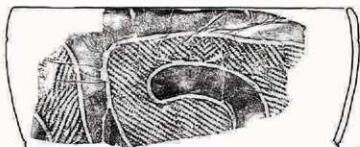
第 150 図 縄文時代中期末葉の土器 (4)



1(H197)



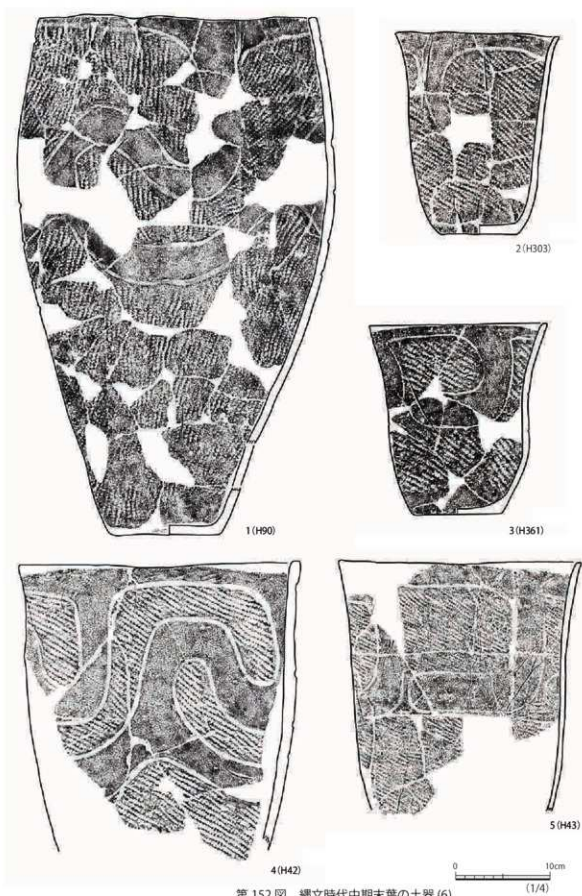
2(H199)



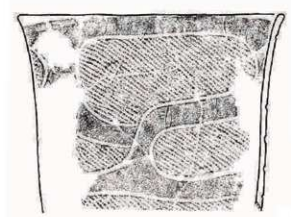
3(H253)



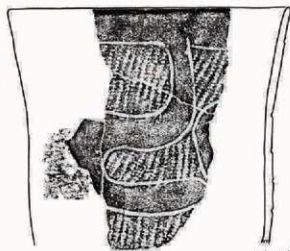
第 151 図 縄文時代中期末葉の土器 (5)



第 152 図 縄文時代中期末葉の土器 (6)



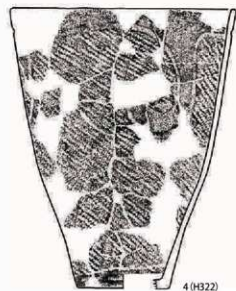
1 (H95)



2 (H208)



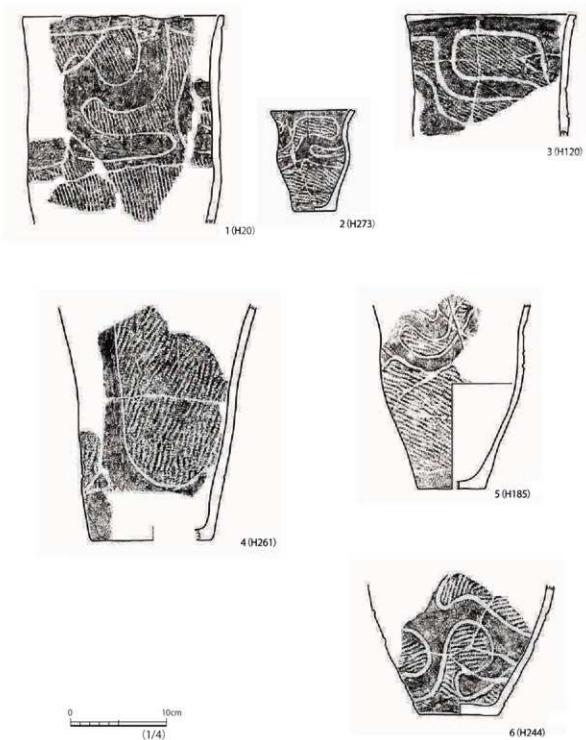
3 (H378)



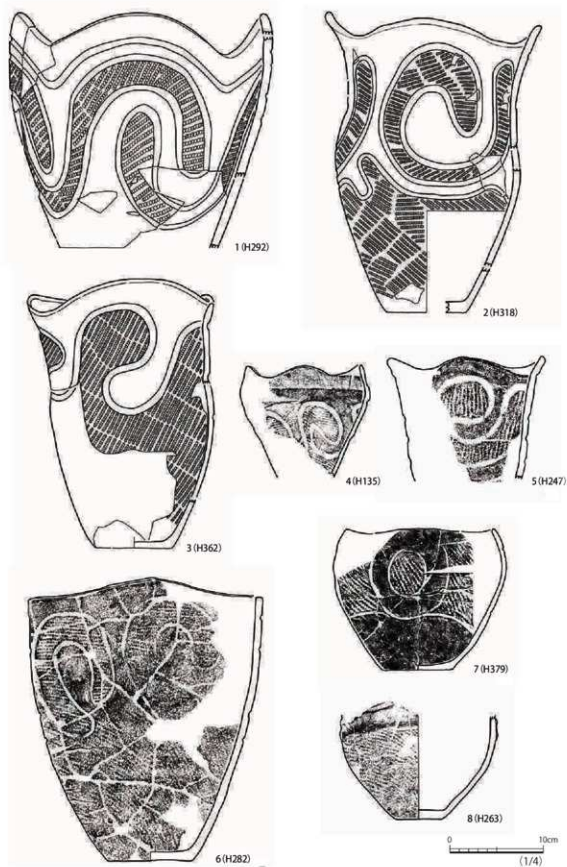
4 (H322)



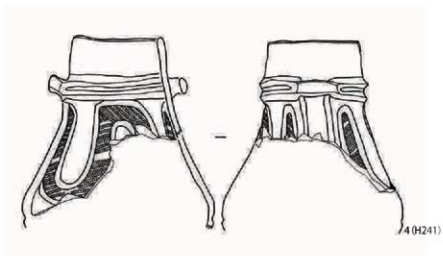
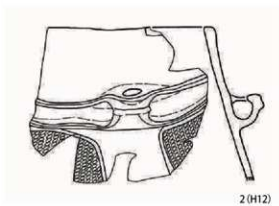
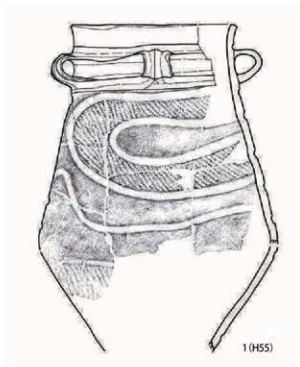
第 153 図 縄文時代中期末葉の土器 (7)



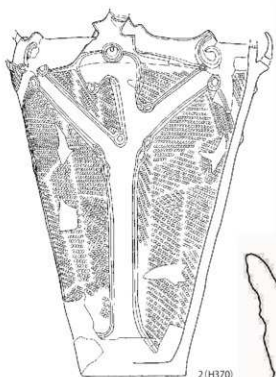
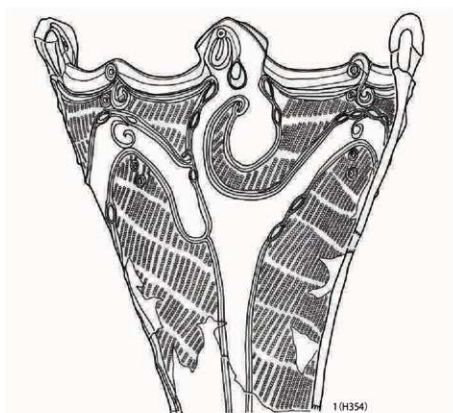
第 154 図 縄文時代中期末葉の土器 (8)



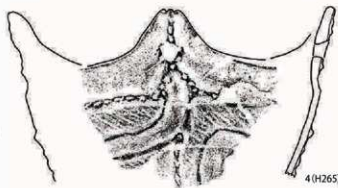
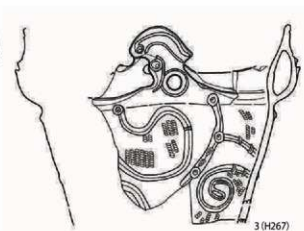
第 155 図 縄文時代中期末葉の土器 (9)



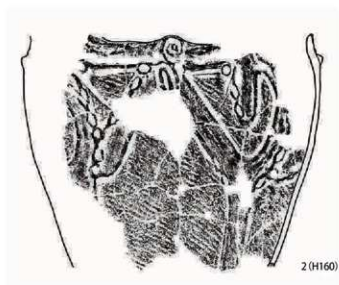
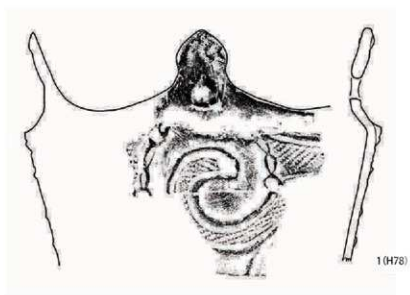
第 156 図 縄文時代中期末葉の土器 (10)



0 10cm
(1/4)



第 157 図 縄文時代後期初頭の土器 (1)



第 158 図 縄文時代後期初頭の土器 (2)

第161図5の裏形の半精製土器と第164図3の注口付半精製土器は、共に口縁部は巡る沈線と研磨無文帯で飾られている。

外面に斜縄文が施されるものが多く、燃糸文、網目状燃糸文等は少ない。

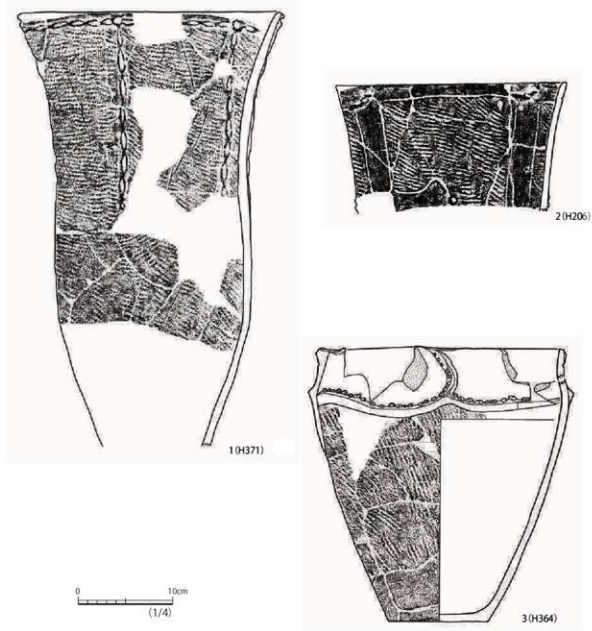
第164図の3以外は、粗製の中小形のや鉢、台付鉢である。数は少なく、縄文以外の文様はない。

器台・高台 (第167図 図版60～61)

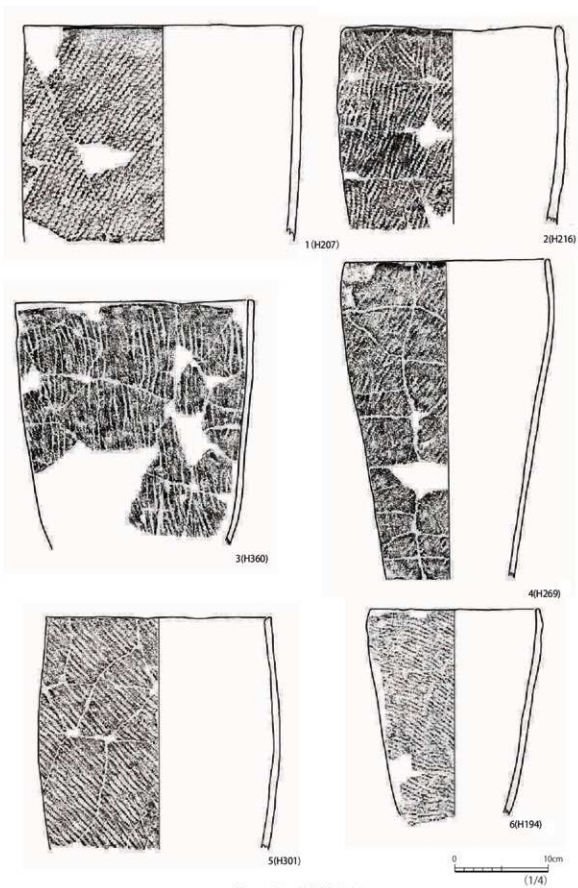
第167図の台類のすべてに、窓がある。器台の外面は、縄文と無文と2種ある。台付の台には、無文と精製並みの施文との2種ある。

土器底部 (第168・169図)

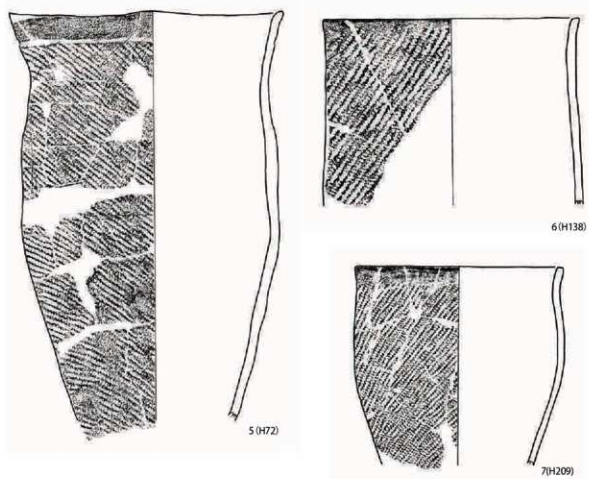
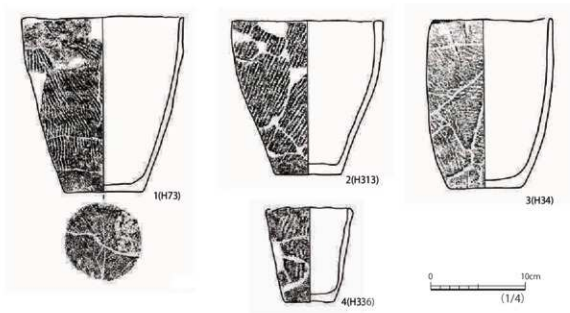
登載した底面拓影は、第169図1の木葉痕1例を除き全て組織物痕である。



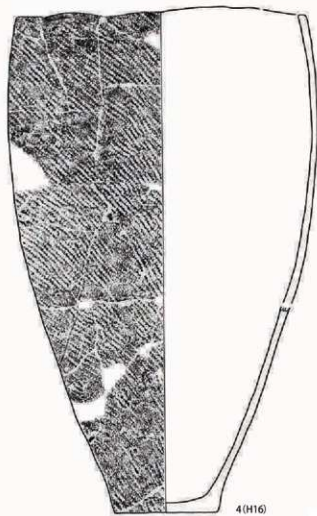
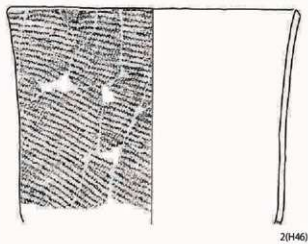
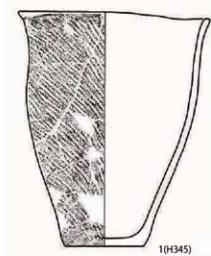
第159図 縄文時代後期初頭の土器(3)



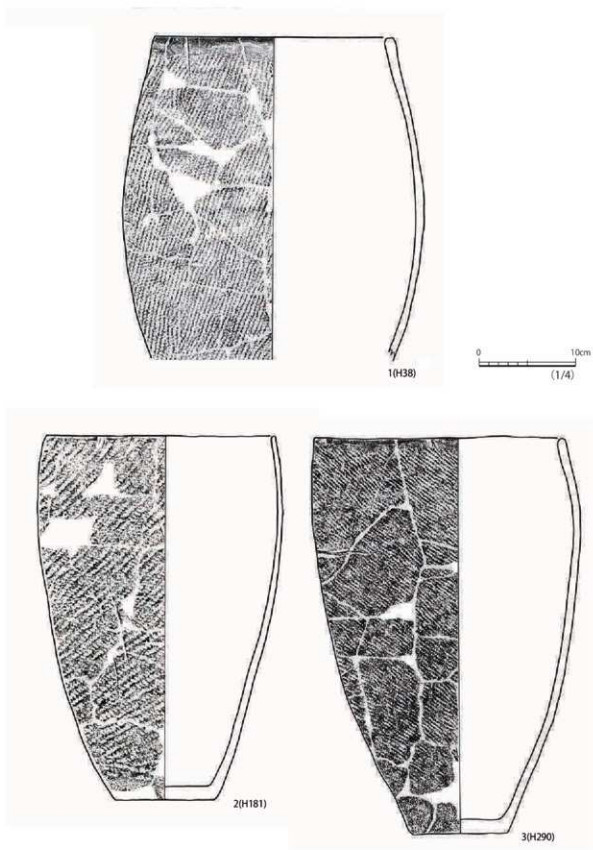
第 160 図 粗製土器 (1)



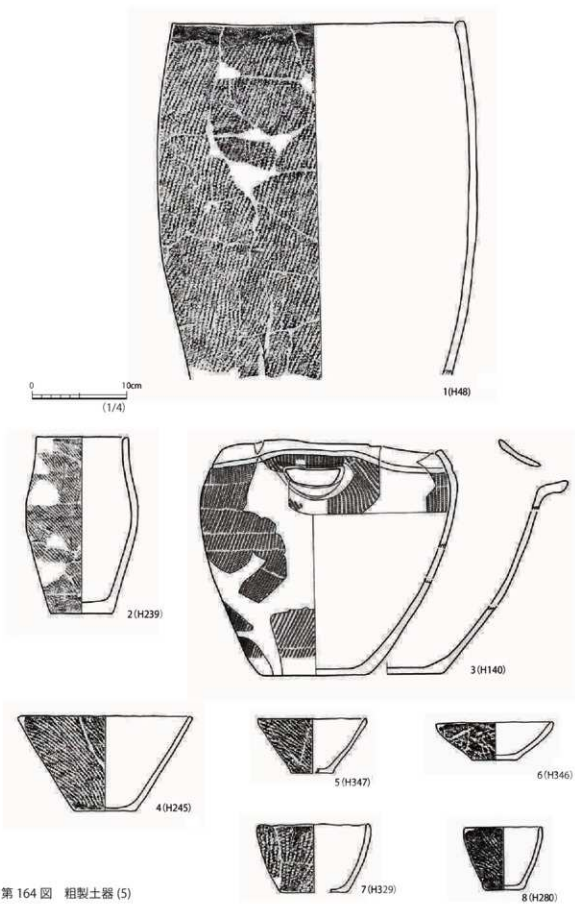
第 161 図 粗製土器 (2)



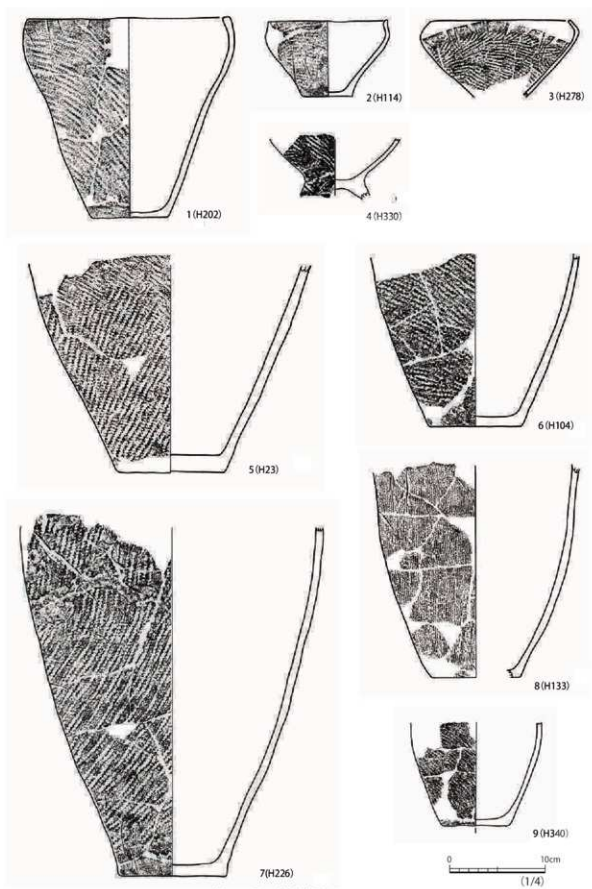
第 162 図 粗製土器 (3)



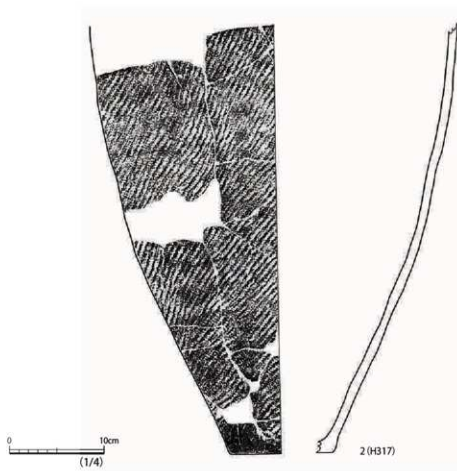
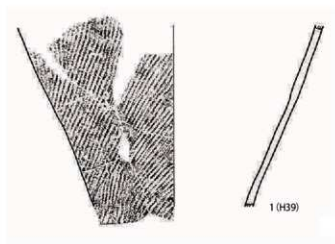
第163圖 粗製土器(4)



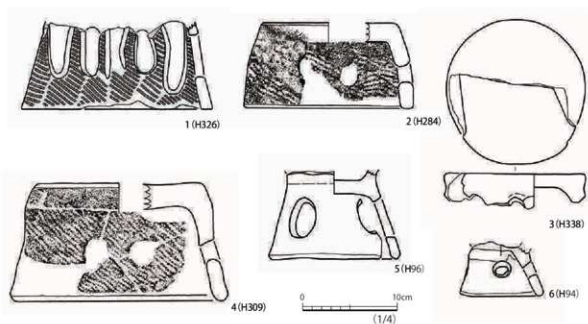
第 164 図 粗製土器 (5)



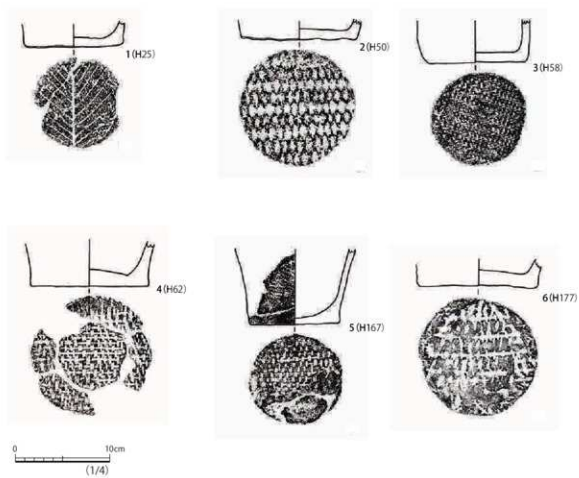
第 165 図 粗製土器 (6)



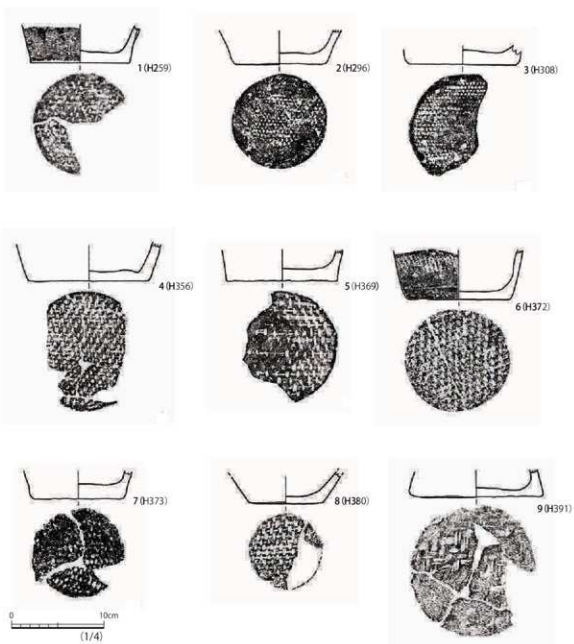
第 166 図 粗製土器 (7)



第 167 図 器台・高台



第 168 図 土器底部 (1)



第 169 图 土器底部 (2)

土製品

ミニチュア土器 (第170図 図版61)

1・2は丸底を呈する。1は深鉢形、2は浅鉢形、3～7は平底を呈する。3の底部は高台状である。4・5は口径と底径の差が小さい環状の形態を呈する。6は口径と底径の差が大きく、僅かに上げ底を呈する環状の形態を呈する。8・9は口縁がわずかに立ち上がる皿状の形態を呈する。10・11・14は台付鉢の脚部である。14には円形の透かしがみられる。12・13は口縁が内傾した深鉢形を呈する。12は有孔突起2か所を有する。

有孔土製品 (第171図 図版62)

穿孔がみられる土製品を一括した。1は縄文土器片を円形に整形し穿孔を行っている。2・3は円環状の形態を呈する。4～7・9は管状の形態を呈する。8は楕円球の形状を呈し、穿孔方向は長軸に直交している。いずれも孔に紐をおし結束することで装身具にしたと推定される。

耳飾 (第172図 1～3 図版62)

1・2は断面形状が白形を呈する。1は表裏両面に渦巻状の刻線文がみられる。2は表裏両面の縁辺部に円形刺突文がみられる。3は断面形状が滑車形を呈する。

不明土製品 (第172図 4・5 図版62)

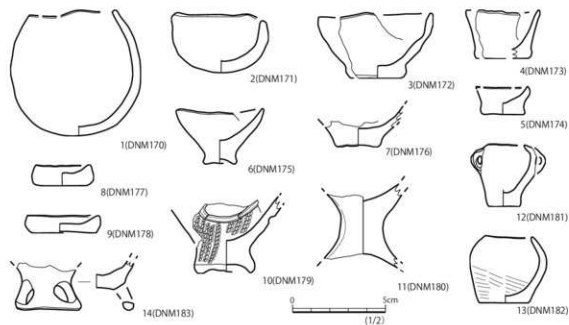
4・5は用途を特定できない土製品である。4はおおよそ円錐状の形状を呈するが、胴部中央付近にくびれがある。スタンプ形土製品、あるいはキノコ形土製品に近い形態をとる。5はL字状に屈曲する断面円形の土製品である。土偶の四肢の部位に似るが、剥離痕などは認められない。

鉢形土製品 (第173図 図版62)

紐部の破片である。全面に不規則な円形刺突が施されている。貫通孔は中央付近にある。

土版 (第174図 図版62)

全て破片である。1・3は三角形あるいは中央がくびれた方形を呈すると推定される。1は表面に刻線による幾何学文と円形の列点文、裏面と下側面には不規則な円形列点文、両側面には刻線文がみられる。3は表面は無文、裏面と側面にまばらな列点がみられる。2は不整形を呈すると思われ、表



第170図 ミニチュア土器

面のみに列点文が施される。4～6は密に施文された列点のみがみられる破片である。

有孔棒状土製品 (第175図 図版62)

下部が欠損しているため全形は不明である。上部に長軸の直交方向に貫通孔がある。全面に縄文が施文され、下方に向かって厚さと幅は狭まる。斧状土製品の可能性がある。

土偶 (第176～180図 図版63・64)

第176図1は頭部を欠失した上半身である。扁平な板状を呈し、欠失しているが乳房表現の痕跡が観察される。左右両腕の中央には垂直方向の穿孔がみられるが、左腕の孔は貫通していない。全面に列点文がみられる。正面の肩付近には刻線も施される。2は頭・両腕を欠き体幹部が残る。表面には両乳房と下半身中央付近に1か所突起がみられる。上半身は板状であるが下半身は厚みを増して広がり、断面が楕円形となり直立する。右肩付近には垂直方向上下から穿孔がみられるが、貫通していない。背面には列点で下向き矢印状の文様が施文されている。

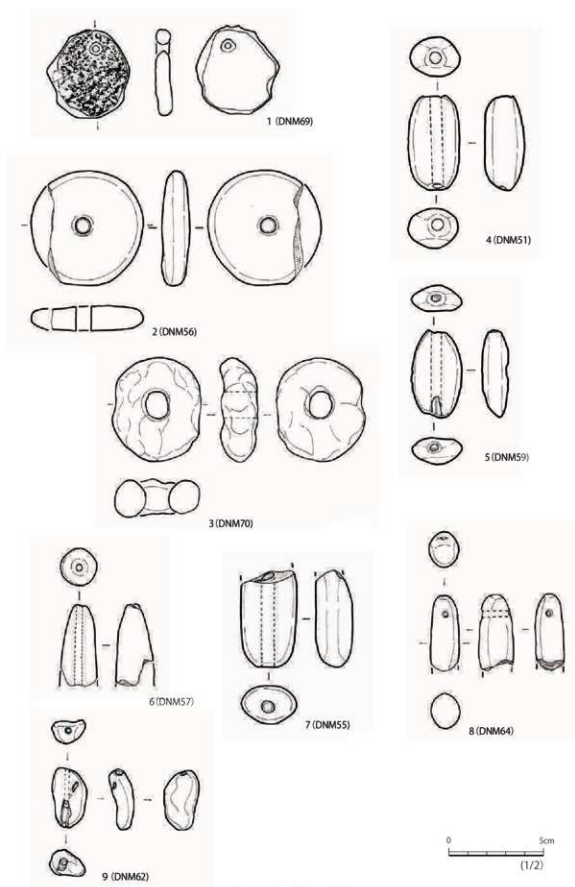
第177図は全て破片である。1は胸部と思われ片方の乳房が残り、列点文がみられる。2・3は手先から腕部で列点文がみられる。4は肩から腕の一部で無文である。5は脚上げ直立する土偶の脚の一部である。7は直線的でやや細いが脚の一部とした。

第178図、第179図1・5、第180図は土偶であるという確証はないが、直立する板状土偶に近い形状を呈すると推定される。共通する特徴は、おおよそYあるいはT字状の外形を呈し、直立するように造作されている。頭部は無いが三角形の小突起を持つ、首基部に穿孔が多く見られる、列点文が施文されるものが多い。

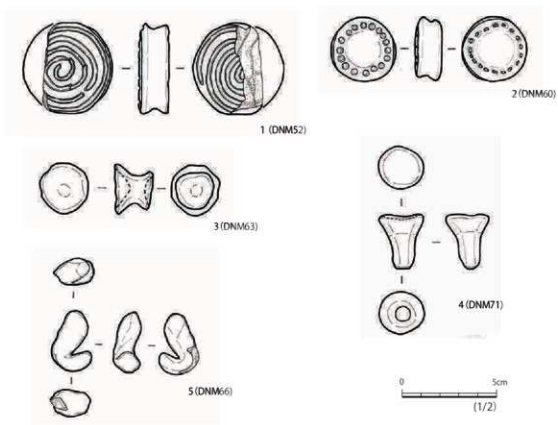
第178図1は両腕部は欠失するものの、大きく広げY字状に掲げていたと推定される。首にあたる位置に穿孔がみられる。円形の基部に水平方向に2か所の貫通孔がある。底面を除く全面に連続する列点文が施される。2はY字に広げた片腕部破片であると推定される。首にあたる位置に穿孔がある。3の腕部は水平に伸びていたようで、頭部は腕より突出して、全形は十字状に近い。頭部には中央よりやや右寄りに穿孔がみられる。底面を除く全面に列点文がみられる。4はY字状の外形を呈し、広げた腕の中央、首の位置に穿孔がみられる。基部側面の中央に水平方向の2か所の貫通孔がある。底面を除く全面に列点文が施される。

第179図1は腕を水平に広げたT字状の全形を呈する。胴部上端の中央に1か所穿孔されている。基部側面の中央に水平方向の貫通孔が2か所ある。5は基部破片である。側縁が弧状に広がり両腕部はYあるいはT字状になると推定される。穿孔が2か所あるが、一方は水平方向に貫通し残りは斜方向に伸びる。2・3は胴部以下の半壊品である。いずれも直立できるように底面を広げている。2の正面には上方中央に円形突起があり垂直方向に行を成す列点文がみられる。背面には交差する刻線文の内側に列点文を施す。3の正面には中央付近に円形突起がみられ列点文が施されている。列点文は円形突起の上方では左右3行づつに分かれているが、下方では1行となって左右の脚の分離表現ともみられる。背面には直線状列点文と弧状列点文がみられる。4は胴側縁部の破片である。表面は列点文がみられる。

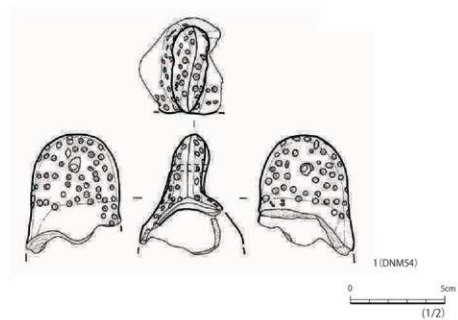
第180図は無文で腕部がY字状に広がるものを一括した。1は両腕部の一部が欠損するものの全形が推定される。胴部上端の中央に垂直方向の穿孔がみられる。胴部下方の中央に正背面から水平方向に穿孔されているが、連結していない。底面は中央がくぼみ、やや上げ底となる。2は小形で両腕部は短い。胴部上端中央には垂直方向の穿孔がみられる。基部には正背面に2か所づつ穿孔がみられるが、一方は貫通し他方は貫通していない。3も小形で両腕先端部を欠き、胴部上端中央には山形の突起がある。基部には穿孔がみられる。基部側面から底面へ、正面から水平方向に背面へ、正面から斜め下方に背面基部へ抜ける3か所である。



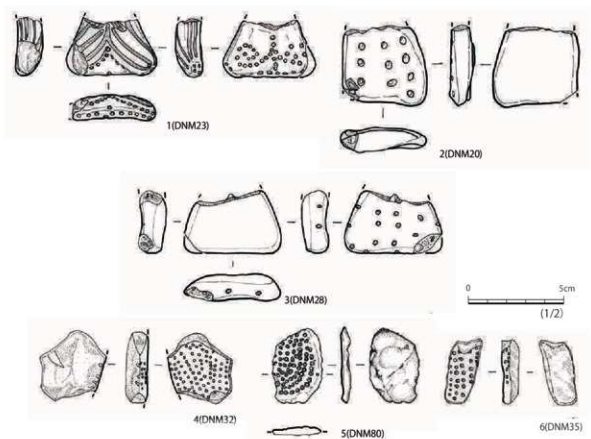
第 171 図 有孔土製品



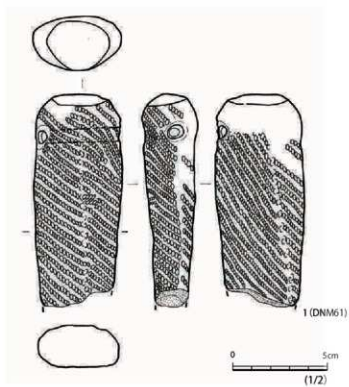
第 172 図 耳飾 他



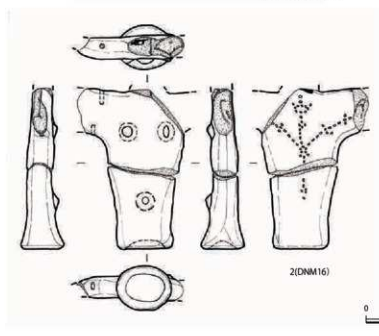
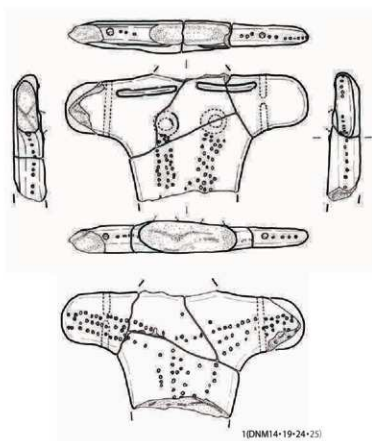
第 173 図 鐙形土製品



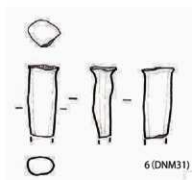
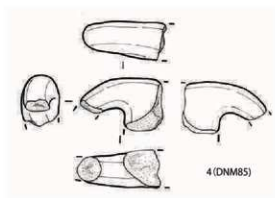
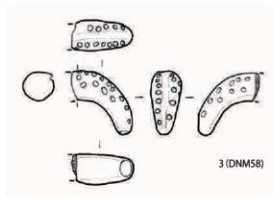
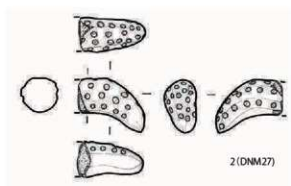
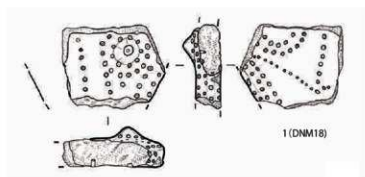
第 174 图 土版



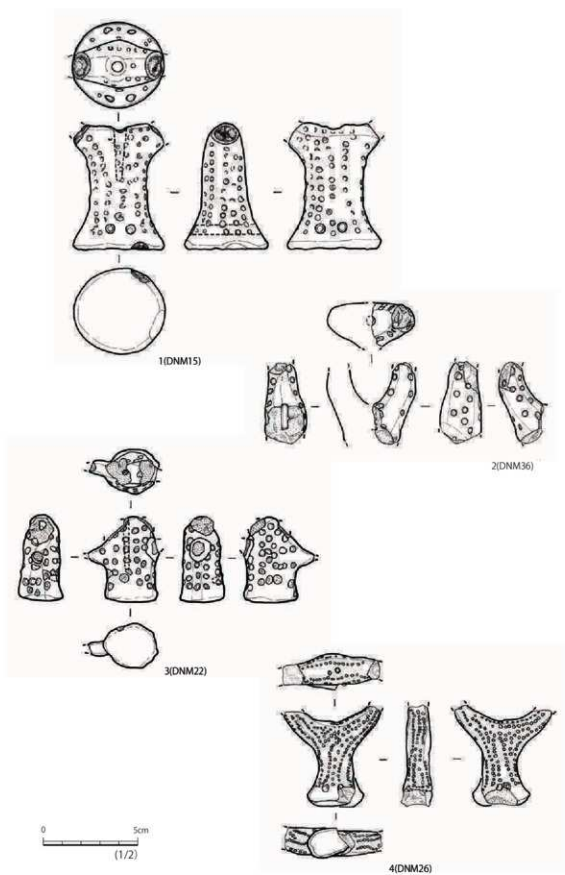
第 175 图 有孔棒状土製品



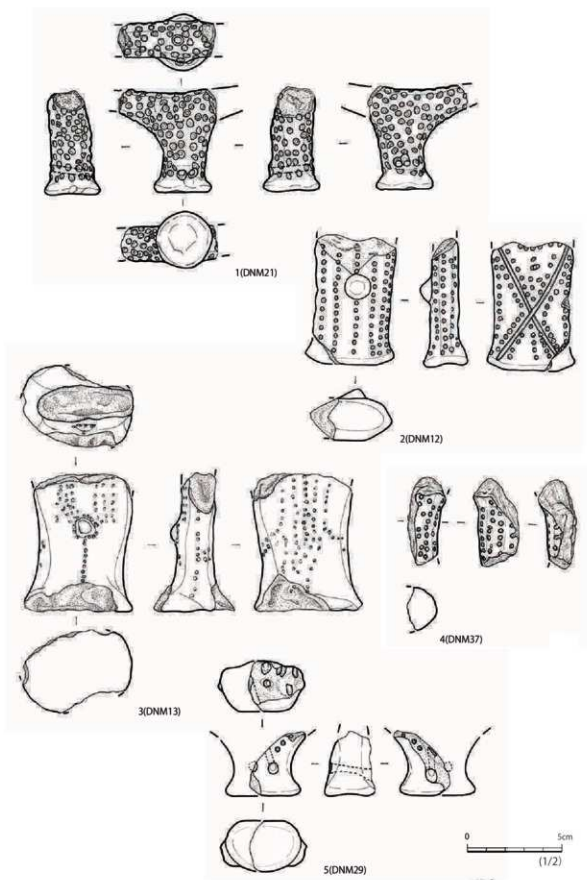
第 176 図 土偶 (1)



第 177 图 土偶 (2)



第 178 图 土偶 (3)



第179図 土偶(4)

土器片製円盤 (第181図 図版64 図表2)

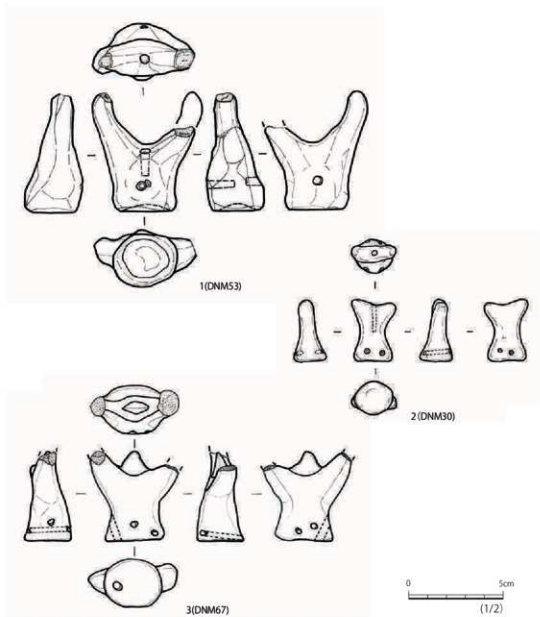
2区から土器片製円盤は372点出土している。最重量は1で66.1g,最軽量は12・13の3.5gを計る。
長軸幅を短軸幅で除した正円比は1.0を中心に、重量は10～20gに集中する傾向を指摘できる。

石器

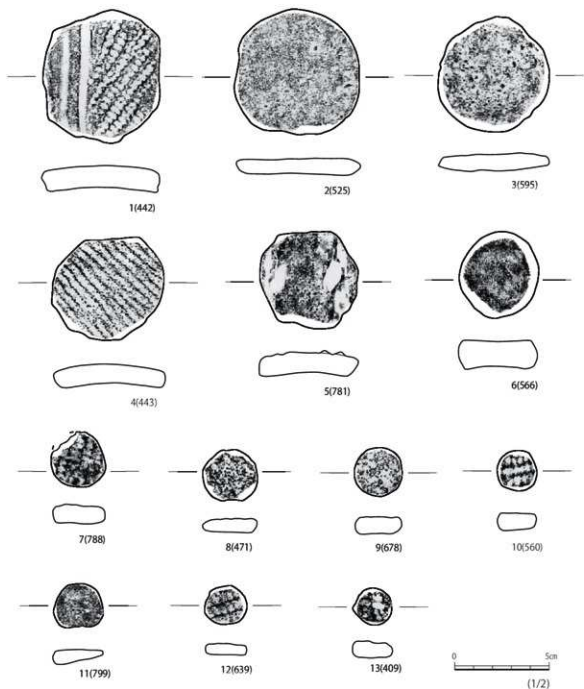
2区から出土した定形的な石器は総数851点で、内訳は石槍1点・石鏃201点・石錐16点・石匙19点・石鏟2点・両極石器2点・搔器100点・打製石斧2点・磨製石斧19点・敲石60点・磨石165点・砥石58点・凹石96点・礫器70点・石皿28点・台石6点・調整剥片等4点を数える。

石鏃 (第182図1～28 図版65)

有茎(1～4)と無茎(5～28)に大別できる。1は直線状の側縁をもち二等辺三角形の肩部を呈する。2・3は緩い弧状の側縁をもち二等辺三角形の肩部を呈する。4は弧状の側縁を呈し先端部の突出も鈍い。



第180図 土偶(5)



第 181 図 土器片製円盤

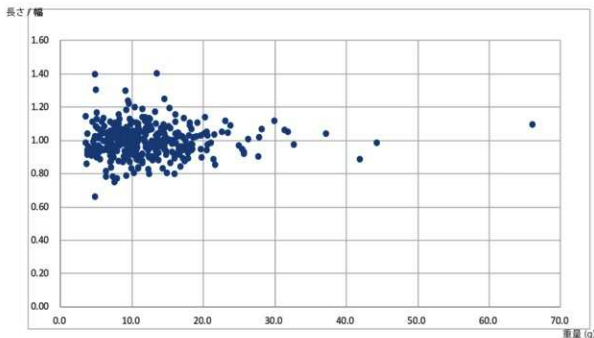
無茎の石鐏は基部形状によってさらに細分できる。5から9の基部側縁が直線状のもの、10～18の基部側縁中央がくぼみ弧状を呈するもの、14～28の基部側縁中央が深く抉入し、基部全形が燕尾状を呈し身幅は細く整形されたものの3種である。直線状の基部である5・6は正三角形形状を呈し、7～9は二等辺三角形形状を呈する。14・15・17・22～27の表裏面にはアスファルト付着がみられる。

石楨 (第 182 図 29 図版 65)

先端から基部までの両側縁が緩い弧状を呈し、両面に人念な調整剥離がみられる。

石鐏 (第 183 図 1～4 図版 65)

すべて鐏部と握み部の境が不明瞭なものである。1・2は比較的短い鐏部に両面から人念な調整が加



図表 2 2区出土土器片製円盤の属性分布

えられている。3・4は鉢部の一部を欠く半壊品である。摘み部を含み両面から入念な調整が加えられている。

石匙 (第183図5～10 図版65)

刃部の作出方向によって、5～9の縦型と10の横型に大別できる。5・6は緩く弧を描く側縁を刃部としたと思われる。5は表面全体に入念な調整剥離がみられるが、裏面には刃部周辺のみ調整が施される。6は表面の両側縁部のみに入念な調整剥離が施される。7・8は緩く弧を描く両側縁を刃部とする。7の表面は入念な調整剥離が施されるが、裏面は下端部のみが調整されている。8は表面全体と裏面両側縁部に調整剥離がみられる。9は先端部が突出せず直線状の刃部である。調整剥離は身部と摘み部の境と片側縁部の表裏両面に集中してみられる。10は摘み部に対し水平方向に伸びる身部を有する。表裏面ともに両側縁部に調整剥離が集中している。

石籠 (第183図11・12 図版65)

全形が籠状で、盛り上がる表面に対し平坦な裏面を呈し定形的な形態である。11は下端部中央がやや突出するのに対し、12は直線状に調整されている。

挿器 (第184図1～3 図版65)

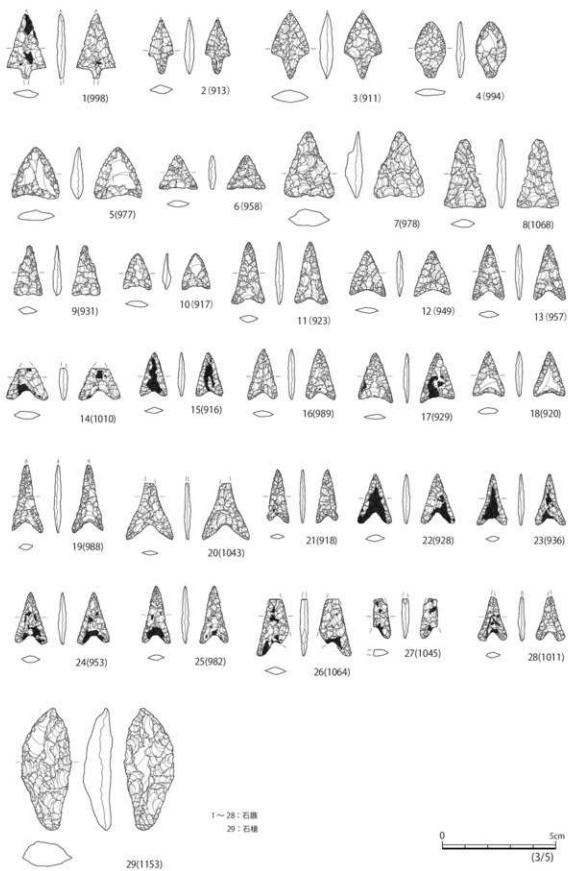
1は両側と下側縁を刃部としたと推定され調整剥離が集中している。裏面上端には打痕がみられる。2の表面には下側縁を除き全側縁に調整剥離が施されている。3の全形は不整な変形を呈している。両側縁全体を刃部としたと推定され、同部位に表面からの調整剥離が集中している。

石鑿 (第184図4～6 図版65)

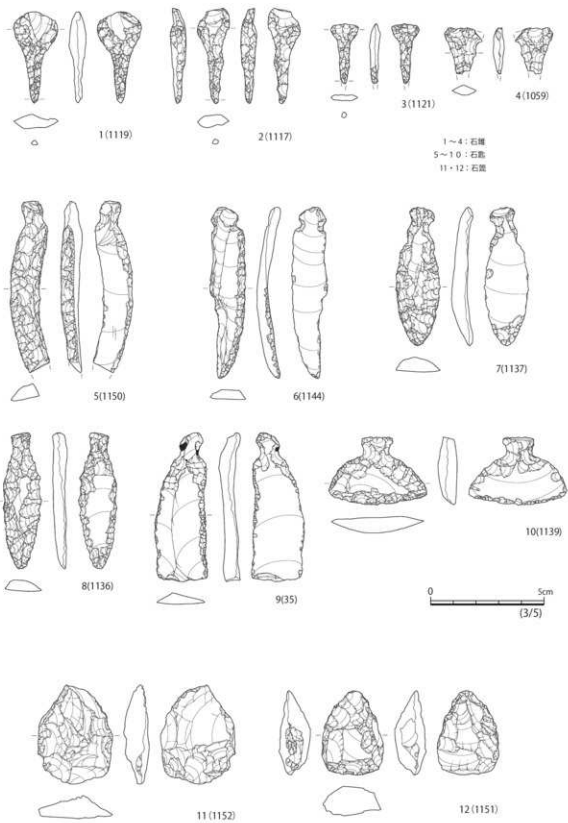
全面を平滑に研磨されている。磨製石斧とするするには細身であり、刃部から基部までの身幅はほぼ一定であり、身部の厚さも変わらない。

磨製石斧 (第185図・第186図1 図版66)

第185図1・2は、ほぼ同形を呈する。いずれも刃部先端に欠損が認められる。全面が入念に研磨されている。第186図1は、大形で側縁端部は角を成さず、断面形は長楕円を呈する。全面を丁寧に研磨整形している。刃部端部を大きく欠き、基部周辺には敲打痕が残る。片岩製で微細な多孔が見られる。実用利器としては軟質な印象を受け、欠損部以外に使用痕も見られず儀礼具として用いられた



第 182 図 石鏃・石槍



第 183 圖 石鐮・石匙・石鎚

可能性がある。

砥石 (第 186 図 2・3 図版 66)

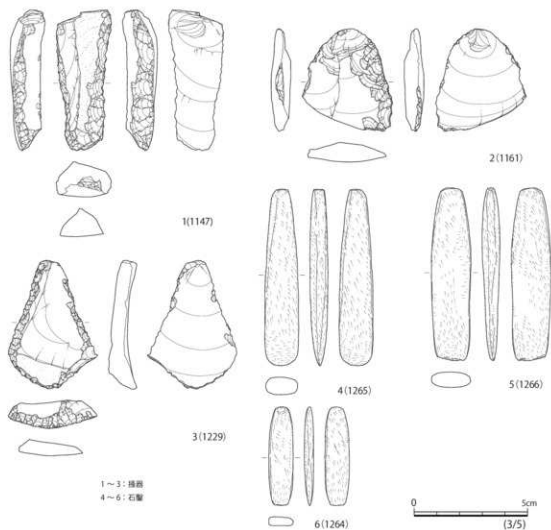
2 は表裏両面に研磨面がみられる。研磨によって生じた溝が表裏両面に 1 条ずつある。3 も表裏両面に 1 条ずつ研磨によって生じた溝がみられる。

敲石 (第 187 図 図版 66)

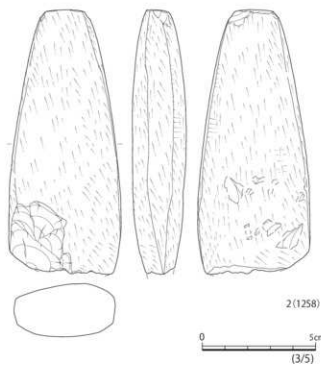
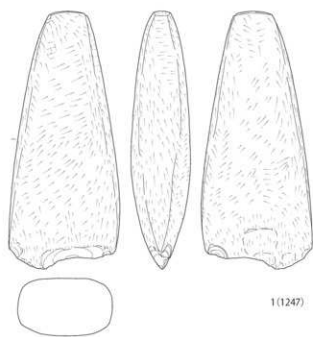
1 は円形を呈し上下端部に敲打にともなう剥離やつぶれ痕が観察される。2 は不整形円形で下端部に敲打痕が集中している。3 は角柱状で両側面全体に敲打痕がみられる。

石皿 (第 188 ~ 191 図 1 図版 67)

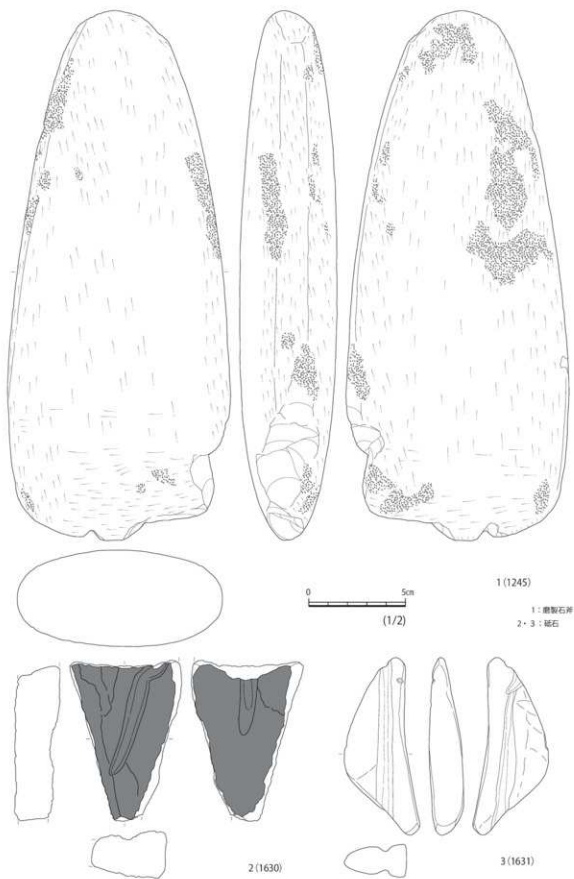
全て大形のもの破片である。第 188 図 1 と第 190 図は表裏両面に、それ以外は表面のみに研磨痕がみられる。外側縁と推定される端辺が直線状のものが多く、全形は方形を呈していたと推定される。190 図の 1 は裏面に脚部が作出されている。2 は側縁端の内側に断面三角形の凸部がみられ、研磨面との境となっている。



第 184 図 搔器・石盤



第 185 图 磨製石斧 (1)



第 186 図 磨製石斧 (2)・砥石

石製品

石棒 (第191図2・第192図 図版68)

191図2は環状の頭部を呈する半壊品である。丁寧な研磨によって成形されている。第192図1は両頭で全面よく研磨され平滑に仕上げられている。2は頭部が扁平な円形に整形されている。頭部には円形外周に沿った刻線がみられる。半壊品である。3は大型石棒の基部と推定される半壊品である。

断面は隅丸方形に近い楕円を呈する。

石刀 (第193図1 図版68)

表裏面ともに平坦に研磨されている。断面厚に目立った差は認められない。

石剣 (第193図2・3 図版68)

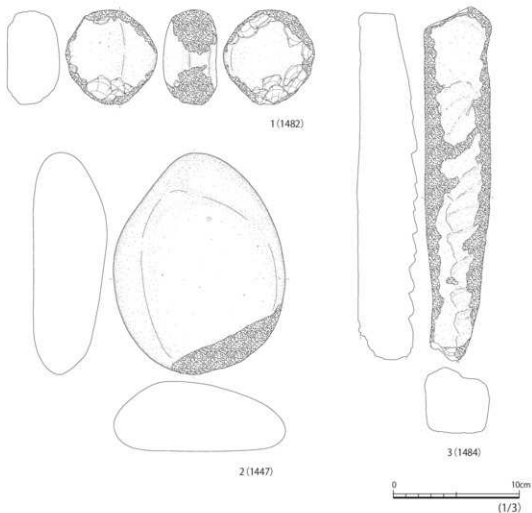
2は両側縁が緩突出する。3は断面中央が鎗状に肥厚し、表裏両面から側縁端を尖らせるように入念に研磨されている。

異形石器 (第193図4・5 図版68)

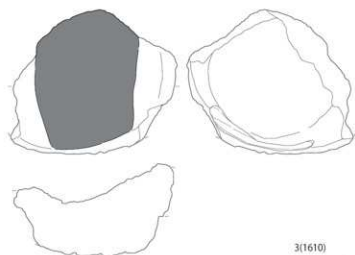
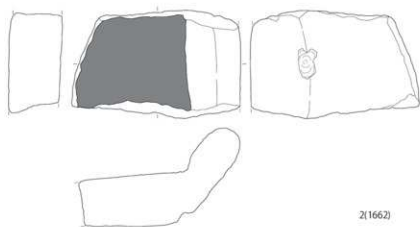
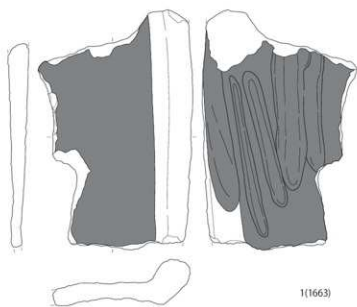
いずれも破片である。4は全形は不明であるが、入念で微細な調整剝離が表裏両面に施される。5は逆Y字状を呈すると推定される。先端と片尾部を欠くが、細かい調整剝離が全面にみられる。

石製円盤 (第193図6 図版68)

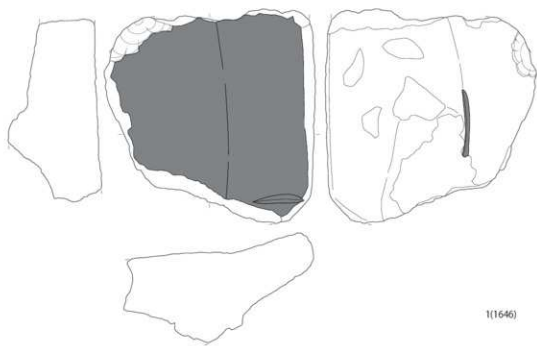
扁平な剥片の周縁を打ち欠き円形に整えている。



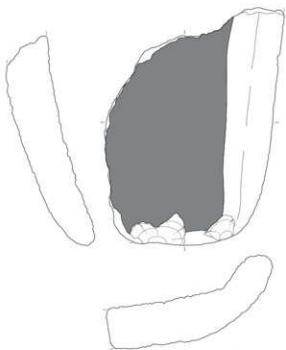
第187図 敲石



第 188 図 石皿 (1)



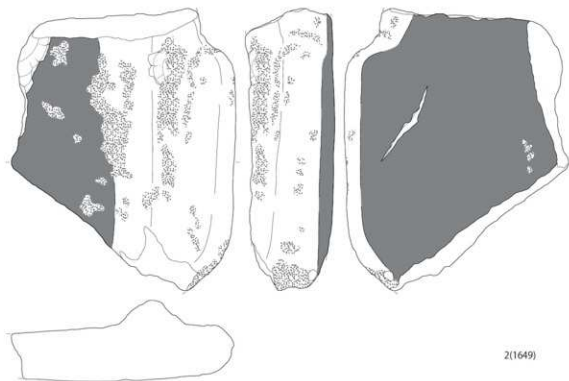
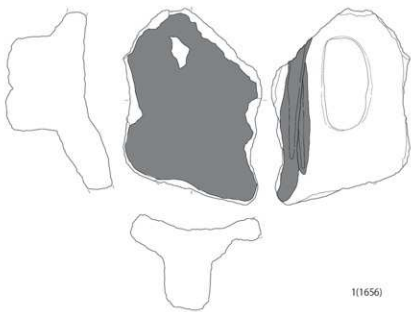
1(1646)



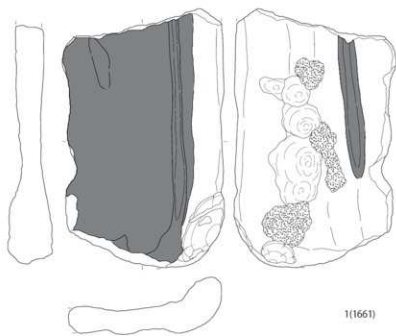
2(1651)



第189図 石皿(2)



第 190 図 石皿 (3)

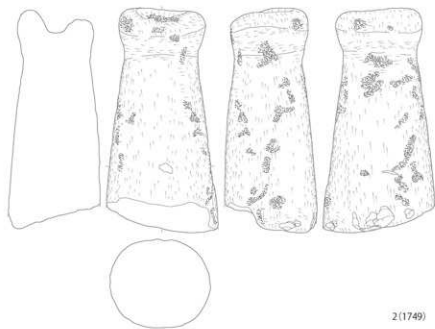


1(1661)

1: 石皿
2: 石棒



(1/2)

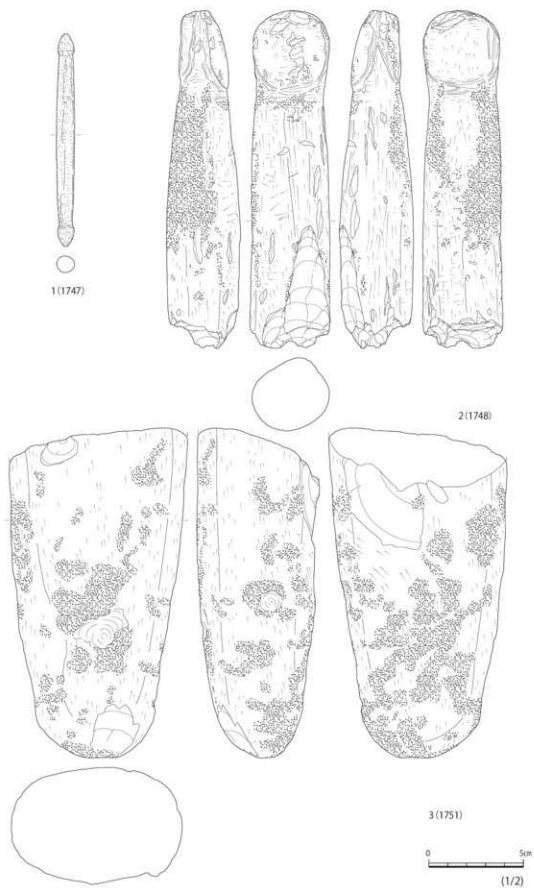


2(1749)



(1/3)

第191図 石皿(4)・石棒(1)



第 192 圖 石棒 (2)

有孔装飾品 (第 193 図 7～11 図版 68)

穿孔を施し垂飾として身に着けたと推定されるものを一括した。7は円形を呈し中心付近に表裏両面から穿孔している。8は不整楕円形を呈し上半部の中央に穿孔している。9は扁平で牙状の形状を呈し、上半部に穿孔されている。表面は平滑に研磨されている。質感は緻密で灰白色を呈し軽量であることから素材は動物骨かと思われたが、細部を拡大すると軽石状の構造がみられ火山噴出物を加工したと推定した。10・11は長楕円形の扁平な相似した全形を呈する。10は身部に対し垂直方向に上下両側面から両端部に2か所穿孔している。11は身部に対し水平方向に表裏両面から両端・中央部に3か所穿孔している。

装飾品 (第 194 図 1～3 図版 69)

1は断面三角形を呈し、全面を入念に研磨し平滑に仕上げている。2・3は断面が方形を呈し、全形は環状を成していたと推定される。腕輪の可能性もある。2は表面に放射状の線刻、裏面には器面に沿った環状の線刻と、それに交差する放射状の線刻がみられる。内外側面は溝状に中央が窪む。3は表面と内側面に器面に沿って溝状の線刻が施される。

有孔軽石 (第 194 図 4・5 図版 69)

用途不明であるが穿孔がみられる軽石を一括した。4は隅丸方形の外形を呈し、穿孔は側面中央からやや下寄りに、水平方向に穿たれている。5は不定形で表面中央付近に1か所穿孔がみられる。

岩偶 (写真 3)

軽石製の岩偶と推定される。外形はダルマ形を呈する。両側面上方に水平方向に貫通孔がある。正面上半中央に方形区画を線刻し、内部に2ヶ所小穴を開け鼻孔とする、その下方の口にあたる位置にやや大きめの穴を穿つ。鼻の上方には左右に1ヶ所ずつ穿孔し目とする。背面の上部には水平方向に並列し2ヶ所の穿孔が見られる。目と側面の貫通孔の間に水平方向に擦痕が巡る。

骨角器

全て SU 1 の貝層サンプリング・コアの水洗別中に検出された。

釣針 (第 194 図 6 図版 69)

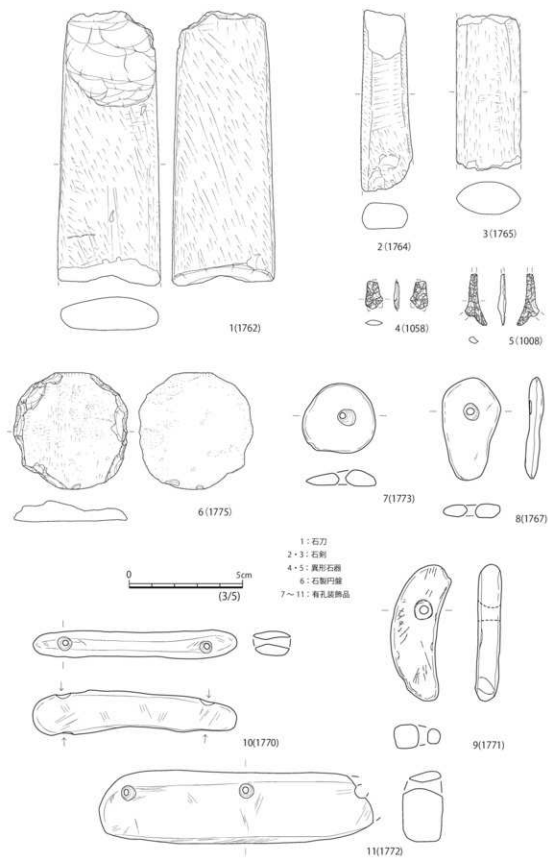
鹿角製釣針である。針先部の半壊品で極めて小さいが、カエシを作出し入念に作られている。

骨篋 (第 195 図 2 図版 69)

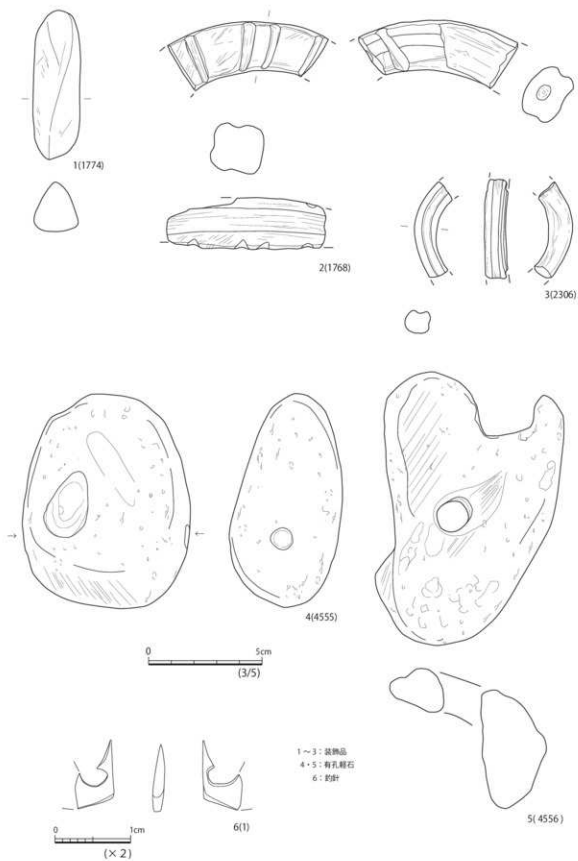
第 195 図 2 は鹿角製の破片で、角表皮の凹凸がわずかに残る。被熱し白化している。骨篋と推定される。

不明骨角器 (195 図 1・3・4 図版 69)

第 195 図 1 は板状の破片で、表裏両面の中央が炭化している。器種不明。3・4 は棒状に加工し全面を滑らかに研磨している。骨針あるいは髪飾りであろうが、器種は特定できなかった。4 はやや反りがみられる。



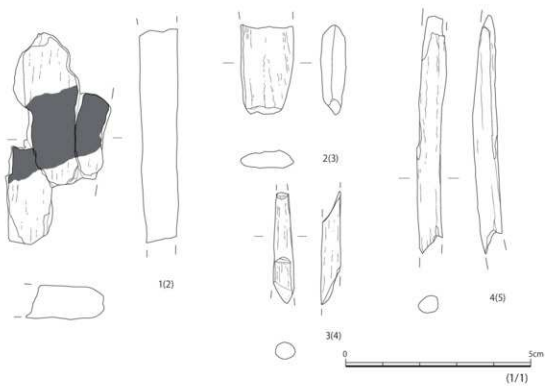
第 193 図 石刀・石剣・異形石器・石製円盤・有孔裝飾品



第 194 図 裝飾品・有孔軽石・釣針



写真3 岩偶 (4/5)



第195図 骨角器

第3節 3区の調査

1 調査の経過と方法

平成23年8月、堂の前貝塚の範囲内である陸前高田市米崎町字堂の前136-6・10において宅地造成工事が計画され、事業者から文化財保護法93条第1項に基づき「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。市教育委員会は、直ちに県教育委員会へ進達を行い工事着手前に発掘調査を実施すべき旨の指示を受けた。指示に基づき事業者と協議し、平成24年7月18日から調査に着手した。

本調査区では、トレンチ発掘による試掘によって縄文時代の遺物包含層は検出されず、直ちに果樹畑耕作によって攪乱を受けている表土を重機によって除去することから始め、地表下30cm程度で大小の礫を含む黄褐色の遺構確認面である地山層を検出した。遺構実測・記録方法と遺物採取方法は、1・2区と同様である。

現地での調査が終了したのは平成24年11月19日であった。

2 遺構の概要と基本順序(第196～198図)

3区の遺構は、竪穴建物1棟・土坑16基・焼土跡1基・小穴164基・道路跡1基を検出した。

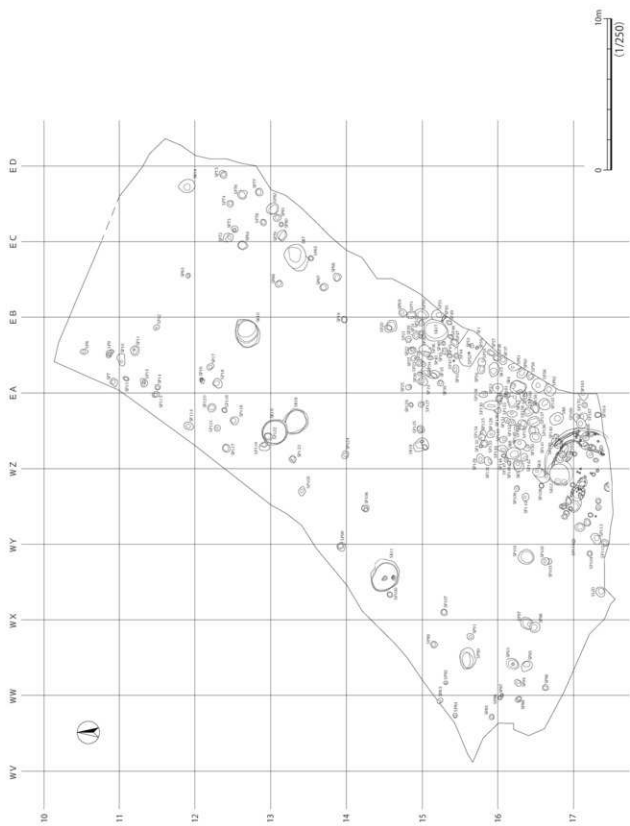
調査区は標高32～30mの緩斜面地で、北西に向け傾斜している。厚さ20～30cmの表土を除去すると、黄褐色土に大小の角礫を混じえる地山層が露出する。1・2区に存在した黒褐色を呈する遺物包含層は存在しない。したがって出土遺物は1・2区に比べ極めて少量で、大半は遺構内の埋土中から検出された。

遺構の分布は、調査区南東側の竪穴建物周辺に小穴が偏る。土坑は、一部重複は見られるものの5～10m程度の間隔をあげ調査区中央付近に分布する。

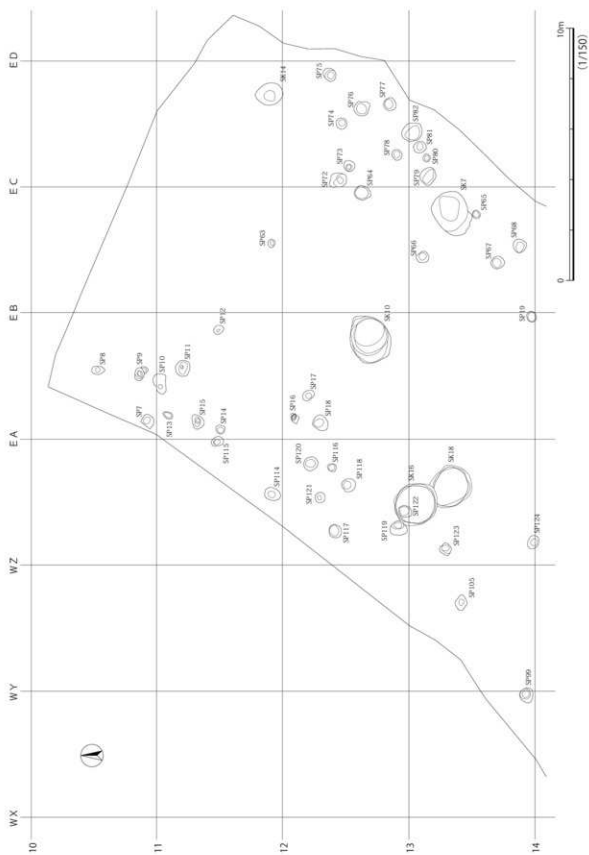
遺構内の埋土は、角礫を多数含む粘性の高い褐色土を主体する。土坑・小穴のうち掘り込みの深いものは、赤褐色の砂質粘土層に達している。



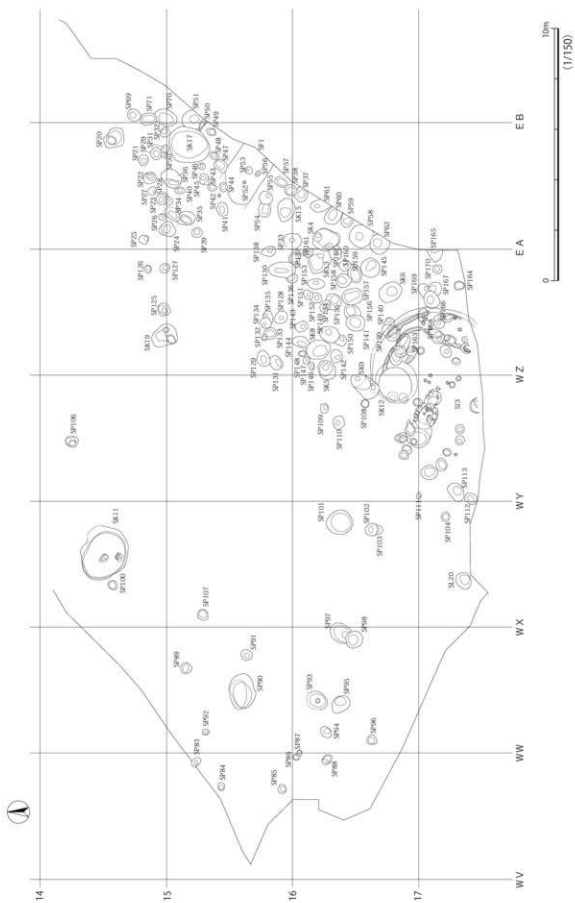
写真4 3区表土掘削状況



第 196 图 3区遺構分布



第197图 3区北半部遺構分布



第 198 图 3 区南半部遗构分布